

教 仁 名 聞

第 104 号
(発行日)

2019 年 5 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

あや雲の流るる如く

平成九年の一月に九一才で往生された藤原正遠師、師は石川県能美市の大谷派浄秀寺に住しておられたお方です。生涯を真宗の求法一筋に生きられ、多くの人に法の恵みを与え慕われたお方でありました。人に対して非常にこまかく優しい心配りをなされましたが、自らの人生に向かう態度は厳しいものがありました。

師は短歌を作るのを好まれ多くの歌を残されています。その中の一首を喜寿の記念にと浄秀寺の境内に歌碑として刻まれた歌があります。それは

あや雲の ながるることく
わがいのち

永遠のいのちの
中を流るる

という歌です。この歌を私
が知ったのは十八才の時
でしたから、かれこれ半世紀

以上昔です。それは私が大谷大学一回生で学生寮に居た頃、前の部屋にいた M 君が「こういう本があるから読んでみないか」と持ってきてくれました。

その本は『あや雲の流るることく』という題で、早速読み始めて非常に感銘を受けたのでした。そのなかにこの歌が載せられていて、それ以後、忘れられない歌となり時々口ずさんできました。

この歌は師ご自身も気に入っておられたでしょうし、また多くの方に喜ばれた歌になりました。

今回は、この歌のお心を伺ってみたいと思います。

歌ですから、そのまま感じていけばそれでいいのですが、説明的になるのは承知で領解を述べてみたいと思います。

あや雲というのは様々な

色や形をした雲で、ここでは私たち一人一人、人間だけでなく生きとし生けるものそれぞれが存在を雲のすがたに寄せて表されたのでありましよう。一人一人はその姿や形、性質や能力、あるいは男女・老少など千差万別です。それはそれぞれが宿業の身といわれるものであり、さまざまな彩りの雲に

ここでたとえられます。あや雲の流るることく、人それぞれのいのちもまた時の流れとともに一瞬一瞬連続しながら流れていつています。そして今ここにこ

うして流れつつ居るのであります。それこそ毎日毎日いろんなことを為しながら、善なり悪なりあるいは無記なりをなしつつ、今こ

こまで流れこころがってきたのです。もちろん私だけでなく、万人、万物が共に流れてきたのであります。楽しい時も苦しい時もなんでもないときも、ほめられたり、けなされたり、働いたりおしやべりしたりしながら、寝

てる時もあり起きてる時もあります。流れ来たったのです。全ての人がです。こうして私たちの形あるいのちは老化し、病気にもなりつつ死へと流れているのです。

これが有限な「わがいのち」のすがたです。

しかし、このようなそれぞれの、いや私のいのちのいとなみは、ただただ「永遠のいのちの中」でのことです。永遠のいのちはいうまでもなく量りなきいのち、まさにアミダのいのち(アミダ仏)でありましよう。いつともしれず過去から流れ流れて今ここにいます。私、その私、あるいは私たちの全分は量りなきいのちの中のいとなみでありましよう。

アミダのいのちを離れては一瞬も私のいのちはありません。私の生も死も、アミダのいのちの中でのこと。

生まれて老いて死すというこの全体がアミダのいのちの中の出来事でありま

しよう。

それはちようどあや雲が生まれ消えていくという、その全ては何処で行われてるかと言え、大いなる大気、大いなる空に於てであります。大気の充ちている空がなければ雲は生まれもしません。

雲がそこに於て生まれ、そこで流れていき、そこで消えていく、そういう場所が「空」であります。

空は仏教の「空（くう）」に譬えられましょう。よく言われる「色即是空・空即是色」というのも（色）とは形あるものいわば雲であり、空（くう）はかたちなきはたらき、それをイメージ化すればまさに「空（そら）」であります。

宗教哲学者の大峰顕師が著名な宗教哲学者の西谷啓治博士に「空（くう）」とはなんですか」と問われたら、博士が「空（そら）」のようなものだ」と答えられたと聞いたことがあります。

アミダ仏の無量の寿命は形なくして一切の形を包

んでおり、一切のいのちを置いて大空のようなもの、その中で小さなあや雲の如き私のいのちが流れ流れて今ここにこうしているようなもの、そのようにして生まれかつ死んでいくのであります。

ただ私たちに大きなことは、あや雲の私が必要な空を一瞬も離れることがなくそれを背景にしていることに（気がつく）ことであります。

この大空のような大きなアミダのいのち、大悲のいのち、功德あるいのち、豊かないのち、この私の背後の豊かなる大悲のいのちに気づくことが人生で一番大事なことです。

それをアミダ仏の「摂取不捨の利益」と申します。これが人生の本当の利益です。

この世の財産も名誉も家族に恵まれていても、これがなければ私のいのちの芯は満たされないので。これがなければいのちの芯はいつまでも空虚であり、空しさと孤独と不安定がついてまいります。

あや雲の如くに流れつつある私に、永遠のいのちであるアミダは私たちと常に共にあり、バックになっており、私のいる確かな場所となつてくださっている。

そのことを言葉でもって知らせてくださるのです。それが南無阿弥陀仏というお念仏です。

一声のお念仏は私の口を通して称えられ耳に聞かれます。ナムアミダブツと聞かれます。

ナムアミダブツと聞くことは永遠のいのちが私に「汝とともにいる」「汝を抱いている」「汝を浄らかないのちの領域である浄土に至らしめる」と仰せくださっているのです。

有難いことに実に単純なお念仏によつて私たちは広大なる永遠のいのちのアミダ仏を知らせて頂くのです。「ここにいます」とのアミダ仏の仰せが今耳に聞こえるお念仏の声であり仰せです。

私と共にいて、私を抱いていたもうアミダは目の前の花にも木にもカラスにも

働いていてくださる。

静物や自然のさまざまなる物に量りなきいのちを感じることがはずかですが可能です。しかしながら、業の深い私は人の行為の善し悪しや、姿形の美醜、その人との利害の有無などにとらわれて、人それぞれに働いてましますアミダの平等ないのちを感じずに差別的に人を見てしまいます。情けないことです。

アミダ仏が全ての人ともにもましますこと、あや雲の流るごとく、われらのいのちも永遠のいのちの中を流れていることをもつともつと感じたいですね。

あや雲のいのちは永遠のいのちを離れてないように、私の生まれて死ぬいのちは永遠のいのちのほかに無いと云うことをほのかながらナムアミダブツにて知らされるのです。信心の智慧は「長生不死の神方」といわれ、信心の智慧によつて不死（無量）のいのちに今ここであわせていただくのです。

老いて死んでいくいのちに即して死なないいのちこそ本当の自己のいのちと知らしていただくのです。

「今、いのちがあなたを生きている」という大谷派のスローガンを本当に理解しようとするなら、「今、いのちがわたしを生きている」ということが分からないと理解できないでしょう。この場合のいのちとは量りなきアミダのいのちです。

では、「今、いのちが私を生きている」ことをどこで知るかといえば、「ナムアミダブツ」と、いのちそのものが私に名のる声を聞きつけていくことによつてであります。

一声一声はいのちそのものであるアミダ仏のお喚び声でありますから、その大悲の喚び声を聞くところにそのことを知らせていただくのです。ほのかながらも知らせていただくのであります。

臨終現前の願により

(和讃問答)

臨終現前の願により

釈迦は諸善をことごとく

観經一部にあらわして

定散諸機をすすめけり

(現代語訳) アミダ如来の

第十九願の意をうけて、釈尊は聖道自力の人を誘因するため、諸善万行はみな浄土真実に導く善根であるとして、観經に、定善の行・散善の行を説き、定善に縁のある人、散善に縁のある人に、それぞれに自力の行による往生をお勧めくださった(黒田覚念「浄土和讃」参照)

* * *

N 「臨終現前の願というものは」

D 「大經に説かれている第十九願のことです。さとりを求める心を起こし、浄土に往生しようとして生涯かけて諸善を行う行者に、臨終の時に佛・菩薩が行者の目に前に現れて浄土に迎え

ようと誓われたアミダ仏の願です」

N 「その第十九願の思し召しを受けて釈尊は観經に定善・散善による往生浄土の道を説かれたのですね」

D 「ええそうです。ただこの道は十八願への方便の願といわれています」

N 「行者を十八願へと導き入れんが為の願なのですね」

D 「アミダ仏の本意は十八願によって真実の浄土(報土)に生まれさせたいのですが、自らの能力を頼みにして十八願によるアミダ仏の願力を憑まない行者に手をさし伸べてくださり十八願へと導きたもうのが十九願です」

N 「十八願だけでは衆生は救えないのですか」

D 「十八願の救いを聞いて直ぐに(アミダ仏の大悲の力ばかりによって助けられなければ助からぬ者であ

る)と、ふたごころなくアミダ仏の願力に身をゆだねる人も当然います。けれどもなかなかそうは直ぐに信受しない衆生が多いのです」

N 「私たちが救いを求める時(今のこの私のような人間ではいけない、なんとかこの自分をしなければとても助からない)と思うのが

ある意味では普通ですね」

D 「そうですね。私は今のこのままではダメだ、ああならねばこうならねば救われない、と思えますね。たとえ十八願の救いを聞いても、すぐに(このままなり

て救うて下さる)と身にしみて受け取らないですね」

N 「ええ、それほど自分自分の力でなんとかなる、自分をよりよい自分に変えることができるという自負心というか僥慢心というか、自己信頼というか、いわゆる自力の心が強いのですね」

D 「それを自力の執心とい

います」

N 「自力の執心が強いと十八願の丸だすけの本願を聞いても、受け付けられない

すね」

D 「十八願を繰り返し聞いても十八願に身をゆだねないのです。ですからいつまでたっても救いがわからない。これについて聖人は化身土巻に

定散心雑するがゆえに、出離その期なし。自ら流転輪回を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。

と仰せられています。定散心というのが自力心です」

N 「自分の心や知性や能力でもって自分を改変し、それによって助かるう、真実を得ようとするのが自力心ですね」

D 「ええそうです。」

N 「そうすると自力の執心が強い人は救われないのですか」

D 「実はそういう自力の執心が強いのが凡夫であるけれど、そういう自力心の強い者で救われたいと欲する者を十八願に導き入れるために、定善なり散善なり

を釈尊はおすすめに、そのような者を見捨てず臨終には聖衆が前に現れ、迎

て仮の浄土に生まれさせ、

そこで仏菩薩からのお育てを受け、ついには十八願に帰して真実の浄土に至らしめようとされたのが十九願です」

N 「ともかくも救われたい、真実を知りたい、浄土に生まれたいという心を起こして定善・散善を行っていく

人に救いに至る導きの手をさし伸べてくださるのですね」

D 「ええそうです。その道を詳しく説かれたのが仏説観無量寿經です」

N 「では定善とは」

D 「観經の中に説かれている十三観のように、浄土に生まれたいと願う行者が心を統一して、浄土とか佛とか菩薩を經典に説かれている様に観想する、それによ

って浄土に生まれようとする道です。心を静めて仏説の通りに如来浄土をイメージし、自らの罪業を懺悔して浄土に生まれようとする道です」

N 「散善とは」

D 「心は散り乱れていても、さまざまな善行(散善)を行

うことによって浄土に生

松並語録より

(遠方法話予定)

○五月四日。福井別院。門徒研修。
午前。法話・座談

○五月九日。名古屋市。高畑会館
午前。法話・座談

○六月一日。福井別院。門徒研修。
午前。法話・座談

○六月二十八日。大阪・難波別院。
午後一時半。法話

○七月五日。名古屋市。高畑会館。
午前。法話・座談

○七月十七日から十九日。福井別院。法話・座談。「心の講座」

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

【念佛寺発行書籍】

(一) 『木村無相・お念仏の便り』

(二) 『松並松五郎念仏語録』

(三) 『真宗の念仏と信心』

(四) 『真宗教学の諸問題』

(五) 『佛に遇うまで』

(六) 『佐々木蓮磨・法味寸言』



○東向きに(地獄行き)
に歩いていくまま、西に引きずられてゆく。東向きの私が西向きに変わるのだから、一代東向きのまま、前になり後になって、南無阿彌陀仏にひきずられる。
南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏
(松並松五郎)

*

浄土真宗にであってご信心を頂いても、私の心は真実にならない。それどころか、浄土真宗に帰すればこそ、真実の心は私になく虚仮だらけの我が心であると、いよいよ知らされる。どこまでもこの世が好きで浄土も願わない。自分の都合の悪いことを嫌い、自分の都合の良いものをひたすら追っかけている、いわば東向き(地獄向き)の私ではない。如来様はそんな東向きの私を東向きのまま掴んで西(浄土)へ西へと引きずって下さる。ああ有難いという、懺悔と讃仰の松並さんの言葉である。

有難くなつてと、どこまでも自分が何とかなつて、なんとかかして助かろうと計らうのです」

N 「定散諸機をすすめけり」とは」

D 「そのように自力執心がもともと強い凡夫に対して、定善・散善をお説きになつて、これを行つて浄土に生まれようとする者を如来の本願力を憑む信心にまで導いていくために、定散二善を積尊はお勧め下さるのです」

N 「そうすると十九願に従つて諸善を行つて、どうなるのですか」

D 「ええ、それによつて逆に純粹な善行のできないものであること、また自分あさましいすがたが見えてきて、我が力によつてはまったく助からぬものであること、煩惱熾盛の凡夫であつて浄土に生まれる可能性が全くないことが身にしみて感じられるのです」

N 「悪を廃して善を行えというお勧めによつて逆に救われがたき自分が知らされるのですね」

まれようとする道です。散善は九品に分けて善人から悪人まで、彼等が心の散るままに善行を行うことによつて浄土に生まれようとする道です」

N 「散善は、心はあちこちに乱れていてももろもろの善根を修することによつて浄土に生まれていく道ですね。このように定善・散善なりの善でもつて助かろうとするのですね」

D 「ええそうです。ですが、どちらでも自力執心が根になつていきます。人はこの世を生きる時は、働いて収入を〈得よう〉とするように、〈結果を予想してそれを得るために行為をする〉という生き方をしてきました。〈私が行うことによつて結果を得よう〉という考え(罪福心)で生きてきましたので、真実を求める場合にも自分の行為によつて助かろうとする自己信頼の気持ちが強いです。この態度で真実をつかまえようとしたら、自分を変革して真理を身につけようとしたら、あるいは仏法を聞いて、分かつて納得し、ハッキリし、